

# 茶の湯 文化学会 会報

第108号 / 2021年3月29日  
 発行 茶の湯文化学会  
 京都市左京区下鴨森本町15  
 生産開発科学研究所内  
 〒606-0805  
 TEL 075-702-9270  
 FAX 075-702-9314  
 E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp  
 http://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

## 川上不自生誕三百年を迎えて

砂川佳子  
岡本文音

はじめに

令和元年は、川上不自生誕三百年を迎える記念の年であった。本稿では、新宮で行われた記念行事と『不自筆記』、『川上不自茶会記集』の刊行及び祝賀会、それから根津美術館で開催された展覧会について紹介したい。

### 新宮水野家と川上不自

紀伊藩付家老水野家は、江戸幕府初代將軍徳川家康の母方の従弟にあたる水野重央を初代とする。家康の命により、のちに紀伊徳川家初代藩主となる頼宣の傅として藩政を補佐していた。元和五年（一六一九）頼宣の和歌山転封に伴って水野家は新宮城三万五千石に封じられたが、水野家は江戸定府つ

まり江戸在住の家老であった。令和元年は、その水野家が新宮へ入部して四百年を迎える年でもあった。その子である御三家の家老となった家臣のことを言い、紀伊藩には、ほかに安藤家が付けられ、藩主の補佐を行っていた。

そもそも、付家老というのは、川上家は、初代六太夫が元禄十三年（一七〇〇）水野家に足軽と

■表1 川上不自略年譜

年号	西暦	年齢	出来事
享保4年	1719	1	新宮で誕生
享保18年	1733	15	江戸に入り水野家家臣として仕官
享保19年	1734	16	表千家如心斎へ入門
寛保元年	1741	23	七事式の制定に参加
寛延3年	1750	32	真台子伝授される 江戸下向
寛延4年	1751	33	如心斎没
宝暦5年	1755	37	この頃から江戸に定住
安永2年	1773	55	嗣子自得斎へ家督を譲る
寛政9年	1797	79	新宮本廣寺を訪れ先祖の供養塔を建立
文化4年	1807	89	江戸にて没

根津美術館「特別展 江戸の茶の湯」をもとに作成

して江戸で召出された。宝永六年（一七〇九）に新宮での勤めを命じられたことにより転居し、延享三年（一七四六）に没している。不白は、享保四年（一七一九）に六太夫次男として誕生、表千家如心齋に入門し文化四年（一八〇七）に没するまで江戸において茶の湯を広めたことは、周知の通りである。（表一）

### 新宮での記念行事

不白生誕三百年及び水野氏入部四百年を記念して、新宮市では記念行事と供茶式が催された。

記念行事として、令和元年十一月二十三日（土）、和歌山大学客員教授の鈴木裕範氏による「文化が街を創る 城下町新宮未来へのまちづくり」、そして筆者による「紀州徳川家と茶道表千家」と題して記念講演会が行われた。

鈴木氏は、「紀州の和菓子と文化を考える会」を主催し、『紀州の和菓子―その文化とまちづく

り』を刊行するなど、和菓子を通じたまちづくり活動を行っておられる。今回の新宮での一連の記念行事開催も、鈴木氏の御尽力の賜物であり、ここに敬意を表したい。筆者は、『不白筆記』に記述される、紀伊徳川家の茶の湯に関する部分について紹介した。その内容は、以下の三項目に分類される。

- 一、藩主からのお尋ね
- 二、拝領品と貴人のあしらい
- 三、藩主の好み

『不白筆記』に紀伊徳川家に関係する項目は決して多くはないが、茶の湯における藩主の振舞は、藩政史料にも見られない、貴重な史料であるといえよう。

記念行事二日目の二十四日（日）は、川上家の菩提寺である本廣寺において、江戸千家宗家蓮華庵川上紹雪副家元（当時）

により、供茶式が執り行われた。（写真1）

点心席は、料亭すゞ成で調製され、新宮の新鮮な魚介類をはじめとした料理に参会者は舌鼓を打った。本廣寺では、続いて茶道表千家流音無会による茶席が設けられた。音無会は、和歌山県新宮市・東牟婁郡を中心に三重県にもまた

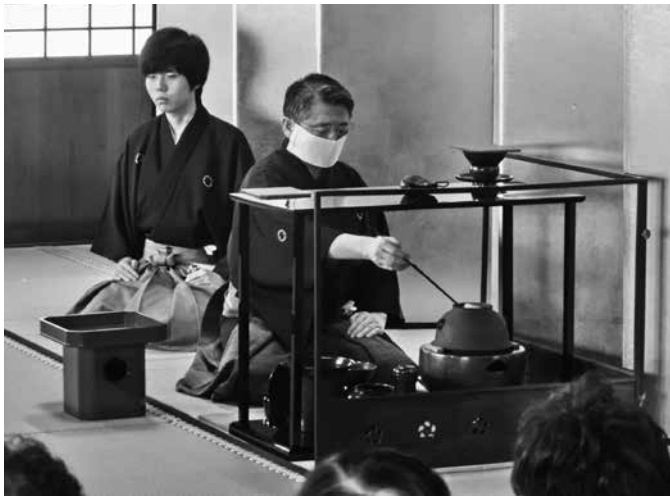


写真1 供茶式の様子

がる表千家流の団体で、平成十九年（二〇〇七）の不白没後二百年を機に、不白を偲ぶ茶会を開いておられる。



写真2 不白生誕三百年を記念して作られた菓子

また、蓮華庵席が宗応寺でもたれ、ここでは紹雪氏監修による菓子「雪月花」が干菓子に供された。「雪月花」は、蓮華庵所蔵の不白自筆掛軸から「雪」・「月」・「花」の三文字と不白の花押を写し取り、新宮市の菓子店福田屋が試作を重ねて完成させたものである。

不白生誕三百年にふさわしい、

新たな名物菓子が生誕し（写真2）、新宮での記念行事は、盛会のうちに終了した。（砂川）

### 記念出版

川上太白生誕三百年記念出版として、中央公論新社より『太白筆記』と『川上太白茶会記集』の二書が刊行された（監修・川上宗雪 江戸千家家元・編・谷晃野村美術館館長）。

『太白筆記』とは、太白が表千家七代如心斎より学んだ事柄の詳細や如心斎の逸話、七事式の制定事情、みずからの茶の湯観が記されており、「啐啄斎に与ふる書」とも呼ばれる。研究者のみならず茶の湯愛好者にとっても、興味深い内容であるが、四十年ほど前に一度、翻刻の発行がなされてはいるものの、江戸千家茶の湯研究室からの私家版であったため、人々の目に触れる機会は少なかった。今回、新たな翻刻が一般書出版社から刊行されたことにより、読者

層が広げられた意義は大きい。

また、太白の茶会記集は二十三点が知られ、京都における如心斎のもとでの修行時代の二十四歳から、米寿の祝賀茶会の八十八歳の六十五年にわたる。『川上太白茶会記集』は、そのうちの五冊、六百五十余の会記の翻刻がなされた。ほぼ初めての活字化で、十八世紀後半の茶の湯の様相を伝える貴重な史料になったといえる。今回の翻刻には谷晃氏を主宰に、八尾嘉男氏、岡宏憲氏、そして岡本の四名があたった。

### 記念出版祝賀会

『川上太白茶会記集』出版祝賀会が令和元年十二月一日、帝国ホテル東京に六百五十名が集い、盛大かつ華やかにおこなわれ、岡本も翻刻スタッフの一員として、祝賀会に招待していた



写真3 記念出版祝賀会

だいた。川上宗雪氏の挨拶、谷晃氏・根津公一氏の祝辞、そして祝宴と、終始和やかで晴れやかな祝賀会であった。（写真3）

そのなかでも印象に残ったのが、端唄と清元による祝いの演奏である。それまで茶の湯の祝いの



写真4 端唄と清元による祝いの演奏

席で耳にした演奏は、謡や鼓などによる能楽であったため、江戸の華ともいえる三味線音楽による寿ぎに初めて接し、江戸千家の茶の湯は、江戸文化によって深められ、かつ江戸文化を牽引してきたことを、驚きとともに実感すること

なった。演奏された端唄「紀伊の国」の作詞は、江戸千家二代自得斎宗雪によるとのことである。(写真4)

## 「江戸の茶の湯」展

根津美術館では「川上太白生誕三百年 江戸の茶の湯」特別展(期間・令和元年十一月十六日―十二月二十三日)が開催され、祝賀会の前日に訪れた。太白にかかわる数多の茶道具・資料などが展示されており、紅葉に彩られた晩秋の根津美術館は、多くの観客で賑わっていた。太白が江戸文化の担い手であったことが伝わってくる展観であったが、とくに「不白翁句集」に興味がひかれた。俳諧は江戸時代に盛んとなった文芸であり、不白は歌銘にかわる句銘を茶器に用い、茶の湯に俳諧を受容した先駆けとして知られるからである。

余談になるが、陳列ケースのなかに、翻刻を担当した茶会記『孤

峯不白京都附』と、注作成のために参照した不白門人の名が記された『茶人家譜』を見つけ、喜んだのは言うまでもない。(岡本)

## 例会

### 東京例会

(令和二年九月十九日)

### 『『南方録』の名物盆』

### 福島 修

『南方録』には、いくつか名物についての記述が登場する。本発表では、同書における名物道具の記述を通じ、その道具観を確認した。とくに重視されている道具が「鎌倉茄子」「花山天目」「青磁雲竜水指」の名物三種である。これら三種を飾るためには特別な飾り方があり、そのために必要な道具が、六枚の名物盆であった。すなわち、①山水馬人物に「月山」銘が入る堆黒盆「月山長盆」、②趙昌の草花を青貝蒔絵で描く菊花形

盆「趙昌雷盆」、③堆黒屈輪の「常長盆」、④黒漆に沈金で丸龍を描く「中丸盆」、⑤黒漆青貝の二重蔓唐草文を表す「大丸盆」、⑥外側面は堆黒屈輪、内面は無文黒漆塗の「尺長盆」の六枚である。この中にも格の序列があり、最高の位置をしめるのが「月山長盆」である。

「月山長盆」評価の根拠は、主に「カネ割」に照らして「名物を飾ったときに最高の場所に来る寸法」である。しかしその寸法は伝来どおり永享以前に日本へ齎されていた唐物漆器というよりも、むしろ十七世紀以降の作品に近い。任仁発(月山)の銘が入るという特徴も奇妙であり、「カネ割」理論説明のため創作された盆と考える方が自然に思われる。

『南方録』の名物盆は、足利將軍家に由来する逸話を権威の基盤として、カネ割の原理に基づく秩序の中に整理される。ここで形成されるのは名物における格の序列

であり、またそれぞれ飾るべき対象を持つことによる、存在を相互補完する構造である。同書の主張する理論は、こうした緊密な構造がその一端を支えている。

### 北陸例会

(令和二年十一月二十八日)

「堀口捨己の分離派建築会から茶の湯研究へ ―モダニズムと古典建築―」

### 市川秀和

二〇二〇年は、日本近代建築運動の出発点と評される「分離派建築会」が結成した一九二〇(大正九)年から百年後に当たり、東京と京都の二会場で大きな回顧展が開催された。大学卒業を目前にした建築学徒6名が、新しい建築芸術の創作を求めたモダニズム運動の開始であり、この中心人物こそ堀口捨己にほかならない。堀口は、茶室・茶の湯という日本の古典文化を探究した建築家として一般的に知られているが、その対極のモ



ダニズムから独自の活動を始めたのは、如何なる経緯や理由からなのか。かかる問題解明の糸口を探ろうとするのが、本発表の主旨である。

若き堀口が「如何にしても芸術は自分からの創作でなければなりません」と主張して先導した分離派建築会は、伝統的な様式や造形を批判して斬新な表現を求めたように一見捉えられるが、実は決してそうではない。堀口らは、歴史や伝統ある様式を安易に踏襲するだけで新しい創作に挑まない停滞した当時の「建築家の態度」を厳しく問い糺したのであった。こうした堀口の視座がいつそう明確に現れたのは、この直後のヨーロッパ建築旅行である。ドイツ・パウハウスなどの新しい近代建築よりも堀口が興味をもつて見つめたのは、オランダの自然や風土に融け合って、レンガやコンクリートの新しい壁体を大きな草葺き屋根が柔らかく包み込む住居なのであつた。

大正一三年の帰国後すぐに堀口は『現代オランダ建築』を出版し、自然や風土を活かした現代建築の感覚とその創作に挑む建築家の態度を表明したと言えよう。こうした自然への感覚と洞察力は、高校時代から詩人・北原白秋を通して学んできた短歌と写生論に拠るところが大きいと考えられている。

かかる経緯から堀口の初期代表作「紫煙荘」（大正一五年）が建てられた。これは茅葺き屋根と直線的な白壁面が対照的に印象深い別荘であり、また茶室も付いている。これに続いて堀口は、華道家・西川一草亭が東京・星ヶ丘茶寮で開催する研究会に参加し、茶湯や伝統文化について自由に議論できる場を得た。こうして堀口は、自然の生命観や伝統の造形性を踏まえた新しい創作態度を身に付け、続いて有名な論文「茶室の思想的背景と其構成」「利休と現代建築」などを発表した。従って

分離派建築会から始まる堀口の建築家としての態度に、モダニズムと古典建築の超克による新しい創作世界が見えてくるのである。

## 追悼

前号でお知らせ致しましたが、昨年十月十一日、第五代会長中村利則先生がご逝去されました。中村先生には多くの追悼の言葉が寄せられましたので、前号に引き続き掲載をさせて頂きます。

### 「中村利則さんの思い出」 熊倉功夫

中村さんのおつきあいは、私が京都に移った一九七一年から、それほど間をおかずに始まった。そして「妙喜庵待庵覚書」というすばらしい原稿を『茶湯―研究と資料』十二号（木芽文庫）にいただいたのが一九七六年。それ以降は、何かというと中村さんを引っ

張り出して、一緒に仕事をしていた。

出版では『史料による茶の湯の歴史』上下（主婦の友社）や『山上宗二記研究』一〜三（三徳庵）などいろいろあるが、非常に印象に残っているのは、東京電機大学の船越徹氏の企画でできた『茶室空間入門』（彰国社）で、中村さんが陣頭指揮して電機大の学生諸君が燕庵の実物大の茶室を作った。これは一種の舞台で、屋根は吹抜け、壁は一部を立てずに中が自由に見えるようにしてある。ここへお茶の先生に参加していただいて、亭主と客の動きを初座から後座まで横から上から撮影し、茶室の構造を主客の動きと合わせて考えようとした。炭手前・懐石・中立・濃茶・退出と、本格的な茶事をその中ですべてやってみて、参加した先生方も学生も大いに関心をもってもらえた。これは中村さんの実行力なしにはとてもなしえぬことである。

実作の方でも中村さんをお願いすることが多かった。一番ご苦労をかけたのは二十五年ほど前のことだが、静岡県金谷町に作ったお茶の郷の茶室建築である。小堀遠州の書院・鑽の間・小間の連続する建物を復元することになり、すべて中村さんにお任せした。また庭園は遠州が仙洞御所に作った池庭を復元した。詳細な図面に従って出現した書院も鑽の間も、異様なくらいの装飾性をまとい、いかに遠州の好みが斬新なものであったかを思わせる画期的な建物となった。今は、ふじのくに茶の都ミュージアムとしてリニューアルされたこの施設の中に、中村さんが作った復元茶室と庭園は、なお健在である。

もう一つ私にとつて忘れたいのはやはり二十年ほど前に、中村さんをお願いして自宅を作っていただいたことである。限られた予算であったからずいぶん無理をして、茶室まで作ってもらった。担

当した坂田工務店の坂田さんが、中村さんの告別式の折りに、こんなことを話してくれた。彼が若い頃、伝統的な木造建築を志す人たちを集めては中村さんがしばしば講義をしてくれたという。それが中村さんの親切であった。

一度だけ、中村さんの激しい面を見たことがある。あるシンポジウムで、私が司会をして東大の宮上茂隆氏が安土城の話をした。中村さんの師匠の内藤晶氏の研究を否定したのが宮上さんなので、宮上論だけでは不十分と思ひ、会場にいた中村さんに意見をうながした。はじめ逡巡していた中村さんに、再度意見をうながすと、今まで見たこともない激しい口調で、宮上批判を展開したものだから、議論をおさめるのに司会として四苦八苦した。学問でも実作でも、譲れない一線があつて、その点に關してはとても頑固だったのだらう。

大きな病をかかえながら、何事

にも真摯に全身全霊で当たつてこられた中村さんの生き方に対し、今あらためて畏敬の念を覚える。残された者として、いずれ何かの形で中村さんの仕事を後世に残したいと思う。

### 「中村利則先生の思い出」

船阪富美子

茶の湯文化学会に入会しての楽しみの一つは、地方の見学会に参加することです。通常は入れていただけないような所に入れていただいで、その場の雰囲気味わいながら、専門家に解説いただく、という貴重な機会です。茶室見学が主ということで、中村利則先生がご紹介くださることも度々でした。例えば、京都の藪ノ内や広島の上田宗箇の家元邸、そして赤穂の「田淵氏庭園」もその一つです。それまで利則先生には、ご挨拶申し上げる程度でしたが、ここでは、利則先生自らご案内下さり、近くお話を伺うこととなりました。

「田淵氏庭園」は、江戸後期、塩田地主の田淵家が、藩主を迎えるために、海を臨む三崎山に茶室を建てたことに始まります。藩主を乗せた駕籠は、海側の御成門を通り、麓にある書院の沓脱石の手前にある駕籠乗せ石に置かれます。藩主は、直接、縁側沿いの八畳の御成の間あるいは四畳半の上段の間に通れるのです。

書院を出て、温暖な地に相応しい蘇鉄や流紋岩などが配された庭を見ながら徐々に登っていくと、趣向を凝らした露地の奥に草庵茶室の春陰齋があります。その外露地の垣根や土塀の先にあるのが、茶屋、明遠楼です。楼、とある通り、二階屋ですが、傾斜地にあるため、外露地から直接二階に入るようになっています。ここに来るまでは木々や塀で視界が遮られています。が、それだけに、高台の、縁側のある座敷に踏み入れたときの開放感、は格別です。大きく開かれた窓の外へ目を向けると、眼下に塩田

と海が広がり、眺望が何よりのご馳走だったことでしょう。

このように丁重なもてなしを受ける藩主も、時には、裏門からこっそりと訪れることがあったようです。利則先生が「借金の申し込みに来たんだよ」とおっしゃったときは、あたかも目撃された秘密を教えていただいたような錯覚を抱いたことが思い出されます。

利則先生は、建物や庭のお話以外にも、田淵家が京都の茶人のみならず、多くの文化人と密接なかわりをもっていたこと、北前船による文化・文物の交流の跡が見えることなど、幅広くご教示くださり、学びの多い機会となりました。

利則先生、いろいろなところにお連れいただき、思い出深く楽しい時を過ごさせていただきました。心より感謝申し上げます。

## 「中村利則先生へ」

矢ヶ崎善太郎

大学院に進学したとき、中村利則さんという先輩のお名前は存じておりました。やがて人に紹介されて『町家の茶室』を読み始めましたが、私の机の上にこの本が並んでいると、なぜか指導教授はい顔をしませんでした。その深意は今もわかりません。専門学校で教えていた時、所用で利則先生が主宰されていた設計事務所を訪れたことがあります。修学院駅の近くでした。親しく対応していただいたのですが、その時に「大病をして生死をさまよっていたんだよ」と聞かされました。先生の病気との戦いがすでに始まっていたのでしうか。先生が淡交社から『茶道学体系 茶室・露地』編を出すにあたって「茶室・露地用語初出一覧」作成のメンバーに加えていただきました。茶書類の通覧に集中した数か月は実に有意義な時間でした。出版後メンバーの

一部で『槐記』の勉強会を始めました。ふた月に一度くらいのペースだったでしょうか、一条戻り橋の近くの先生の書齋が集まって難解な文章を読み、疑問があるとコクリートの壁面にびっしりと立てられた書棚から参考書を引っ張り出しては解釈を加えていただきました。やがて先生が大学に籍をおくことになり、しばらくは忙しいだろうと中断したこの勉強会をいつ再開すべきか、つい先日まで相談しておりました。「勉強が足りない」「方法が間違っている」との後進への厳しい姿勢は、殻に閉じこもりがち茶室研究の現状を危惧していたからに違いありません。茶室研究を日本の住宅史の中に位置づけ、これからの住環境にどのように活かすのかを模索されていたのでしう。数年前から三条木屋町の近くにある町家の周辺環境が急変し、短絡的な視野のもとでホテル建設が進められていることを愚行と断じ、高瀬川周辺

景観を保全する活動を開始されました。私も大いに共感することが多かったですから区役所や弁護士との協議の場に同席しましたが、その時の先生の気迫の凄まじさに圧倒されました。「いつしよにやらないか」といわれ始めたのですが、いつの間にか「あとは頼むよ」にかわっていたことに気づいてはいました。別の仕事で「話したいことがある」と入院中の病院に呼ばれたのは去年の三月でした。コロナの渦中でしたので特別に許されての面会でした。これまでにいく度も大病を克服されてきた先生のこと、今回も復活されることを信じ「わかりました。一旦は引き受けませんが、先生が復帰されたらこの仕事、またお返しします。お待ちしております」と言って病室を出ようとしたときに「ああ、あの、もうね。よろしくね」とおっしゃられたことに妙なさみしさを覚えました。この仕事の途中経過をご家族の方にご報告したのです

が、あととはよろしくお願ひします、  
とのお返事をいただいでから間も  
なくの計報でした。先生から託さ  
れた宿題に、まだ何もこたえられ  
ていません。失ったものの大きき  
に呆然としてはいけなないので  
しようけれど。ただただご冥福を  
お祈りするばかりです。

「中村利則さんへ」  
桐浴邦夫

「大目構えについて」、「茶の湯  
文化学』第三号（平成八）に掲載  
の中村利則さんの論文である。お  
ぼろげな記憶では、確かその前後  
の研究会か大会の時にご発表にな  
り、私は大変感心してお話をうか  
がったことが脳裏に蘇る。「大目」  
「大目」などさまざまに記される  
この言葉、どういう起源があるの  
だろうかと、よくわからないまま  
使用してきたが、このときの精緻  
な研究発表で、目の前のモヤモヤ  
とした霧が一瞬にして晴れた。そ  
の日以来、私は「大目」をなるべ

く使用するようにしている。

しかし一方で『山上宗二記』の  
「イルリノトキハ半帖三ツシクナ  
リ」の解説がよくわからなかつ  
た。中村昌生先生が利則さんの解  
説に、なるほど、と仰ったことも  
記憶しているが、私には現在まで  
わからないままである。

ともあれ、研究室の先輩である  
中村利則さんとは、それまで、と  
くに親しくしていたわけではな  
かったが、この頃から交流を持つ  
ようになり、その後ご意見をうか  
がったり、議論することもあつ  
た。もともと議論の時は少々お酒  
が入っていることが多く、かみ合  
わないまま続き、それを見かねた  
誰かが、まあまあ、と入ってきて  
その話題は一旦保留となる。

さて、先に宗二記の話題を出し  
たが、『茶道文化研究』第六輯（平  
成26）で、奇しくも私が宗二記の  
茶室について書くことになった。  
この中で、利則さんの相形待庵を  
否定とまではいわないが、正しい

とはいえないとの意見を記した。  
その後討論会も行われたが、利則  
さんはその頃、すでに入退院を繰  
り返されて、こういう言い方はよ  
くないことを承知しているが、残  
念ながらあまり強く言えなかつ  
た。

じつに悔やまれることである。  
というのも、その数年前、中村昌  
生先生に突然「妙喜庵待庵覚書」  
（中村利則、昭和五十一）はどう  
思う？と問いかけられた。それは  
私が研究を始める前の論文で、恥  
ずかしながら全く読んでいなかっ  
たので、遅ればせながら拝読し  
た。関連の文献も見た。率直に  
言って、大変綿密に調べ上げた研  
究だと思った。が、一方いくつか  
の疑問も持った。松瀬家本（現今  
日庵本）の図をみるとそれは違  
うのでは無いかと。ただ、その時は  
まとめきることが出来なかつた。  
そしてしばらくしてから『茶道文  
化研究』で、今日庵本について  
お話しが舞い込んできたわけであ

る。自分が早く論文を書いていれ  
ば、そしてもっと徹底的に討論し  
たかった。そのことが心残りであ  
る。ご冥福をお祈り申し上げます。

「中村利則先生へ」  
大原 信

先生への哀悼の気持ちと心よりの  
御礼を申し上げます。

先生に出会ったのはいつの頃  
だったのでしょうか。学生でもな  
く、研究者でもなく、名もなき主  
婦達のお茶好きが立ち上げた「高  
槻茶道研究会」に裏千家から諸講  
師の先生方を派遣していただいた  
昭和五十九年頃のことです。約四十  
年ほど前のことでしょうか。子育て  
に一段落して稽古事としてのお茶  
手前は経験していましたが、もう  
一歩前に進んでお茶のことを知り  
たいと思う仲間五十名ほど集まり  
一会を立ち上げ、歴史・書物・器物・  
庭・建築等々、その内の茶室そし  
て茶室の見学の引率で中村先生か  
らお茶と茶室の関係のノウハウを



受けました。二十人から三十人ほどの騒がしい主婦達を引率して、大阪・大山崎・大徳寺等々へと一日三十九名の参加者で曼殊院から銀閣寺へと行ったあの時が、今でも鮮明に思い出されます。

家庭を持つ者は転勤も多く、私も大阪へ帰った六十四年頃には会もなくなくなっていました。茶の湯文化学会に入会し、中村先生に目にかかれ、「高槻の…」と名乗った時、憶えていて下さったことが、うれしくてたまりませんでした。中村利則先生ありがとうございます。合掌

## 例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。

### 東京例会

午後二時～

会場：未定

令和三年六月二十七日(日)

「益田克徳の茶とその周辺―その一」

神保乃倫子・八木京子

『北条五代記』に見る『山上宗二記』の情報について

梯弘人

令和三年九月二十五日(土)

「大聖寺藩主前田利邇の茶」

依田徹

『兼見卿記』に見る茶の湯(仮)

中村修也

令和三年十月二十三日(土)

「益田克徳の茶とその周辺―その二」

神保乃倫子・八木京子

「樂長入の創意について」

今井敦

令和三年十二月四日(土)

「未定」

下村奈穂子

「未定」

谷村玲子

令和四年三月十三日(日)

(ZOOM開催)

「押入・押入床について(仮)」

山岸多加乃

「未定」

水野荘平

東海例会

午後二時～三時半(開場午後一時半)

会場：昭和美術館会議室

令和三年四月二十四日(土)

「幕末変動期の尾張の茶道」

神谷宗銀

令和三年六月十九日(土)

「昭和美術館のコレクションと後藤さち子

藤幸三

令和三年十一月六日(土)

「釜の話」

加藤忠三郎

北陸例会

令和三年九月十一日(土)

「未定」

四辻秀紀

令和三年九月十八日(土)

「未定」

高知例会

令和三年六月二十七日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

「茶の湯文化学会二〇二一年度大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

発表者 未定

軽食茶事 正午～午後四時

— 9 —

席主 三名

会費 千円(参会希望者は予め連絡をして下さい)

令和三年九月五日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

岡倉天心『茶の本』第六章輪読  
(各自お持ちの本をご持参ください)

令和三年十二月十二日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

岡倉天心『茶の本』第七章輪読  
茶事 正午～午後四時

席主 四名

会費 五千円(参会希望者は予め連絡をして下さい)

令和四年二月六日(日)

午前十時～正午

会場：高知県立文学館 慶雲庵茶室

室

高知支部二〇二二年度事業計画

### 訃報

本学会理事の池田俊彦先生が令和三年一月九日にご逝去されました。池田先生には学会会報を始め、学会運営にもご尽力いただきました。交流のあった方もいらつしました。交流のあつた方もいらつしやることと思います。会員の皆様に訃報のお知らせをさせていただきます。

### 新刊紹介

『茶の湯 わび茶の心とかたち』

熊倉功夫著 中公文庫 定価八六〇円＋税

〇円＋税

『天下第一のかぶき者 織田左門』

柏木輝久著 宮帯出版社 定価三、五〇〇円＋税

三、五〇〇円＋税

『長崎代官 末次平蔵の研究』

永松 実著 宮帯出版社 定価九、〇〇〇円＋税

九、〇〇〇円＋税

『茶道お稽古 おさらい帖 濃茶点前』

淡交社編集局編 淡交社 定価九〇〇円＋税

〇〇円＋税

『水屋の研究 茶書から見る成立と変遷』

飯島照仁著 淡交社 定価二、四〇〇円＋税

〇〇円＋税

『中国古代茶文化史』

関 剣平著 思文閣出版 定価九、〇〇〇円＋税

九、〇〇〇円＋税

### お知らせ

令和三年度

総会・大会のご案内

令和三年度総会・大会を左記の日程で計画中です。詳細は四月に

日程で計画中です。詳細は四月に

郵送にてご案内いたします。

日程：令和三年六月六日(日)

総会・大会

場所：東京国立博物館 平成館

大講堂

テーマ：「岡倉天心と明治の茶の湯」

湯」

